家　　庭

1　家庭科における授業改善等の成果と課題

学習指導要領において、家庭科では、自ら課題を設定し、解決に向けて取り組む問題解決的な学習を通じて「よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力」の育成を図ることとしている。

このような資質・能力を育成するためには、各領域が相互に関連を図りつつ、学習を展開し、生活の営みを総合的に捉えることが重要である。さらに、「深い学び」を実現させるために、領域相互の関連を踏まえつつ、各領域における資質・能力の育成と、その一層の深化を図る必要がある。例えば、科目「家庭基礎」の「２内容」の「Ｂ　衣食住の生活の自立と設計」の授業づくりにおいては、衣・食・住それぞれの領域における学習の特質を明確にしつつ、資質・能力の育成とその深まりの過程がより具体的に示されることが求められている。具体的には、食生活分野の食事マナーの学習において TPO に合わせた衣服の着装について学習したり、衣生活分野の被服の機能の学習において衣服気候についての学習と合わせて、住居の機能の温熱について学習したりすることで、気温と湿度の関係性について考察させることなどが考えられる。

また、問題解決的な学習として位置付けられている「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」において、問題解決能力と実践的な態度を育成することとしているが、十分な指導が行われず、学習が形骸化している等の指摘がある。さらに、実践的・体験的な活動を通して資質・能力を育成する観点から、デジタル技術の効果的な活用方法や、収集した情報から思考・判断し、自らの考えを根拠をもって他者に表明するために生成 AI などの特性を踏まえた適切かつ有効な情報収集や、情報活用の在り方などに課題がある。

以下は、各種研修会や指導主事による学校訪問から把握した各学校における家庭科の授業改善の成果と課題である。

成果	課題
○　授業改善の取組の充実 ・生活をよりよくするために考え工夫する学習の充実 ・問題解決的な学習を取り入れた授業の推進 ・生活の中から問題を見いだし、取り組む活動の充実 ○　生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成 ・身近な生活の課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力等」について、日常生活の中から問題を見いだし、解決すべき課題を設定	●　各領域を相互に関連付けた深い学びの実現 ・衣・食・住それぞれの領域の関連性を踏まえた学習の充実 ●　少子高齢化や社会のＤＸ化に伴う家庭生活の変化への対応 ・少子高齢化や電子マネーの普及等、社会の変化に伴う家庭生活の変化への対応 ・消費者教育、金融経済教育についてライフステージに応じた指導の検討 ・生活文化の継承等を念頭においた教育内容の在り方の検討 ●　実践的・体験的な活動を通した問題解決的な学習 ・「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」における学習活動の形骸化 ・科学的な根拠に基づき理解し、その上で生活の中の課題を解決して、家庭や地域の生活を創造する資質・能力の育成 ●　デジタル学習基盤の活用 ・デジタル技術を効果的に活用した実践的・体験的な活動 ・生成AIなどの特性を踏まえた、適切かつ有効な情報収集や情報活用

２　学習指導及び学習評価の改善・充実

(1)「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

家庭科における「主体的な学び」の視点とは、現在を起点に生涯を見通して、家族・家庭や地域、社会の課題を発見し、その解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って、次の学習に主体的に取り組む態度を育む学びの視点である。

また、「対話的な学び」の視点とは様々な人々と対話したり、協働したりする中で、課題の解決に向けて自分の考えを明確にしたり、他者と多様な意見や価値観を共有したりして、自らの考えを広げ深める学びの視点である。

「深い学び」の視点とは、生徒が実生活や社会の課題を他の生活事象と関連付け、生涯を見通して多角的に捉え、解決に向けた解決策の検討・計画・実践・評価・改善といった一連の学習活動の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得する学びの視点である。

また、「対話的な学び」の視点や「主体的な学び」の視点から授業改善を図ることによって、家庭科が目指す「思考力・判断力・表現力等」も豊かなものとなり、相互に支え合う社会の構築に向けて課題を解決する力や、家庭や地域の生活を創造しようとする態度を育成することが可能となる。

(2)「指導と評価の一体化」の充実

「指導と評価の一体化」においては、学習評価を単に学習の成果を評価するためのものとするのではなく、単元や題材などのまとまりを見通し、学習の過程や成果を評価し、その結果を教師の指導の改善や生徒の学習意欲の向上と資質・能力の育成につなげることが大切である。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、単なる授業中の発言や提出物、活動量などを評価するのではなく、生徒が学習の見通しをもち、学習を振り返りながら､次の学習や生活に生かそうとする姿を捉えることが重要である。

さらに、評価規準を学習活動と一体的に設定し、評価のための学習ではなく、評価を通して学びを深め、次の実践や課題解決につなげる評価の充実が必要である。

(3) 未知の状況にも対応できる資質・能力の育成

家庭科では、生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、解決策の構想、実践の評価・改善、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現することなどの学習過程を通して、生涯を見通して生活の課題を解決する力を育成することとしている。社会の変化が激しく、生活や価値観が多様化する現代では、既習の知識や技能をそのまま活用するのではなく、未知の状況において自ら問題を見いだし、必要な情報を収集・吟味し、様々な人々と協働しながら解決方法を考え、実践の評価・改善を繰り返しながら課題を解決する力を身に付けることが重要である。

社会や生活課題が、目まぐるしく変化する中で、生活に直結する家庭科において、実践的・体験的な活動を通した問題解決的な学習は中核をなすものである。

3　指導と評価の計画例

(1) 家庭基礎「食生活と健康」の計画例

ア　単元の目標

(ｱ) 食品の栄養や調理方法、衛生管理、自分や家族の栄養の特徴を踏まえた献立作成について理解するとともに､調理実習を通して調理の技能を身に付けるようにする。

(ｲ) 食品の栄養や調理方法、衛生管理、自分や家族の栄養の特徴を踏まえた献立作成などの中から問題を見いだして課題を設定し、健康で環境に配慮した食生活を営むために必要な解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど、生涯を見通して、課題を解決する力を養う。

(ｳ) 健康で環境に配慮した食生活を営むことができるよう、自分の食生活を振り返って改善したり、生活の中で実践したり工夫したりして、生活の充実・向上を図ろうとする実践的な態度を養う。

イ　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
食品の栄養や調理方法、衛生管理、自分や家族の栄養の特徴を踏まえた献立作成について理解しているとともに、調理実習を通して調理の技能を身に付けている。	食品の栄養や調理方法、衛生管理、自分や家族の栄養の特徴を踏まえた献立作成などの中から問題を見いだして、課題を設定し、健康で環境に配慮した食生活を営むために必要な解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなどして、課題を解決する力を身に付けている。	健康で環境に配慮した食生活を営むことができるよう、自分の食生活を振り返って改善したり、生活の中で実践したり工夫したりして、生活の充実・向上を図るために実践しようとしている。

ウ　単元を貫く問い

「健康的な食生活とはどのようなものだろうか」

エ　単元の指導と評価の計画（18 時間）

次 【時間】	学びの過程	ねらい、学習活動等	重点	記録	備考 ※おおむね満足できる状況（B）
第１次 【１時間】	習得	食事の役割、体と栄養素、高校生と食事など、食事の大切さについて考え、食生活の課題を設定して、学習の見通しをもつ。	思		・現代の食生活や食事の意義、「こ食」など、現代の食事の問題について、どのように改善すればよいのか考察している。
第２次 【１時間】	探究	様々な食生活の問題を学習し、自分の食生活に同様の問題がないかを確認して課題や改善方法を考察する。	態		・食生活の重要性を認識し、よりよい食生活を送るために、自分の食習慣の改善に積極的に向き合おうとしている。
第３次 【１時間】	活用	食事や食品と栄養素の関係について、食事摂取基準や食品群別摂取量などの指標を参照しながら学習し、必要な栄養素や食品の量を把握して、毎日の食生活に生かせるように考察する。	思	○	・食事摂取基準や食品群別摂取量の目安から、日頃の栄養バランスについて課題を見いだし、改善のための工夫を栄養面から論理的に考えてまとめたり、表現したりしている。

第４次 【５時間】	習得	炭水化物・脂質・たんぱく質・無機質・ビタミンの働きと、それらを多く含む食品、効率のよい活用方法を理解する。	知	○	・五大栄養素の種類及び機能とそれらを多く含む食品の栄養的特質を食品群との関連を理解している。
第５次 【１時間】	習得	調味料、香辛料、嗜好品、加工食品の働きと効率のよい活用方法を理解する。	知		・調味料や香辛料の調理における使用目的、調理性、加工食品の種類と留意点を理解している。
第６次 【１時間】	習得	食品表示、食品添加物、フードテック、食品アレルギー、多様な食習慣及び食文化など、食品選択のポイントを理解する。	知		・食品表示から食品の概要を読み取り、食品の選択と購入の方法について理解している。
第７次 【１時間】	習得	食品の安全について、食中毒などの事例を通して学習し、消費者として身に付けるべき知識と技能について考察する。	知		・食中毒の種類と原因及び予防三原則を理解し、正しい食品保存の仕方や、貯蔵・調理場所を衛生管理する技能を身に付いている。
第８次 【１時間】	活用	食料問題や環境問題、災害時の食行動について学習し、持続可能な食生活のために普段からできる工夫を考察し、行動を考える。	思		・持続可能な社会を構築するための課題を設定し、解決策を考え、表現している。
第９次 【２時間】	活用	これまでに習得した栄養や食品に関する知識を生かして、献立を作成できるようにする。	思	○	・献立を振り返り、よりよい食生活のための課題を見いだして表現している。
第 10 次 【４時間】	探究	調理の目的、食品を生かす調理操作、調理を効率的に行うための調理器具の利用の仕方や安全への配慮について学習し、知識・技能を活用して、調理できるようにする。	態	○	・調理実習において、調理の目的を理解するとともに、安全・衛生面に配慮し、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

オ　学習指導案（３時間目／18 時間中）

(ｱ) 本時の目標

食生活の課題を見いだし、食事摂取基準や食品群の種類を活用して、健康な食生活が営むことができる。

(ｲ) 評価基準（思考・判断・表現）

A	B	C
食事摂取基準や食品群別摂取量の目安から、日頃の栄養バランスについて課題を見いだし、改善のための工夫を栄養面から論理的に考察し、まとめたり、表現したりしている。	食事摂取基準や食品群別摂取量の目安から、日頃の栄養バランスについて課題を見いだし、改善のための工夫を考察している。	食事摂取基準や食品群別摂取量の目安から、日頃の栄養バランスについて課題を見いだせない。または、課題を見いだせるが、改善策を考察していない。

(ｳ) 本時案

過程（分）	学習内容	生徒の学習活動	○指導上の留意点 ◆評価方法
導入（５分）	・単元の目標と本時の目標の確認 ・【問い：自身の食生活は健康的だろうか】に対する学習前の考えを Google フォームに入力 ・問いの回答を踏まえた学習内容の確認	・学習内容及びねらいを確認する。 ・問いに対する授業開始時の答えをフォームに入力する。	○本時の目標と学習内容を理解することで、見通しをもたせる。 ○生徒自身が学習目標を立てて、学習を進めていくよう促す。
	・健康的と回答した場合　→自立しても継続するための方策を準備しよう！ **・健康的ではないと回答した場合　→これから何が必要か考えよう！**		

展開（35分）	・生徒自身の食生活について、自己評価を行う。 ・他者の結果と自分の結果を比較し、自分の食生活の問題点を見いだす。（個人思考） ・食生活の課題についてクラスで共有し、共通点を見いだす。 ・配付資料から日本人の食生活の課題に気付き、自分の食生活を改善するために必要な方策を考える。 **配付資料のポイント** **○　肥満者が増加していること** **○　野菜摂取量が少ないこと** **（北海道の野菜摂取量は男女とも全国ワースト２）**	・Google Classroomのリンクサイトから１日分食生活の状況のチェックをする。 ・チェック結果をグループ内で共有する。 ・食生活の状況のチェック結果をもとに、自己評価の理由をワークシートに記入する。 ・グループで互いの結果を共有し、自分の食生活の課題について考え、ワークシートに記入する。 ・食生活に関する課題をクラス全体で発表し、共有する。 ・どのような食生活が配付資料のような結果を生み出すか考え、改善策を考える。	○食品会社の「食のバランスチェック」のリンクを貼り、活用させる。（日常生活の振り返り） ○結果を自分の端末に保存させる。 ○栄養素の過不足等の結果を参考に、自己評価とその理由を簡潔にワークシートに記入させる。 ◆ワークシートの記述 （思考・判断・表現） ○ワークシートの記述内容を確認し、複数の食生活の課題が共有されるようにする。 ○配付資料として国民健康・栄養調査にみる国民の状況を提示する。 ○なぜ、このような調査結果になったのかを問い掛け、生活を振り返らせるとともに、その結果が継続した場合の影響や改善すべき食生活について考えさせる。
まとめ（10分）	・本時のまとめ ・【問い：自身の食生活は健康的だろうか】について改めて考えを Google フォームに入力 ・次時の学習内容の確認	・問いに対する授業終了時の答えをGoogleフォームに入力する。 ・本時の学習で気付いたこと、健康な食生活を営むことがどれほど大切か等、本時の目標の到達度についてワークシートに記入する。	○気付きの変化を確認するよう促す。 ◆ワークシートの記述 （思考・判断・表現）

カ　学習の進め方や学習評価の工夫

(ｱ) 生徒の学習状況を見取る「ワークシート」や「振り返りシート」等の具体例

（表面）





（出典：株式会社明治「食の栄養バランスチェック」）

（裏面）

〔自己評価〕 栄養素の過不足をもとに、自分の食生活に点数をつけるとしたら 10 点満点中何点ですか	
その点数になった理由を記入してください	よい点 問題点
自分の食生活の課題は何だと思いますか	
「国民健康・栄養調査」からわかったこと、懸念される影響とは何ですか	わかったこと 懸念される影響

＜振り返り＞

今日の授業で気付いたことや考えたことを記入してください

(ｲ) 評価Ａ～Ｃの生徒の姿の具体例（ワークシートの記述例）及び評価Ｃの生徒に対する手立て等について

評価Ａ～Ｃの生徒の具体例（振り返りの記述）

A	B	C
食のバランスチェックをしてみて、意外に偏りがあって驚いた。将来一人暮らしをすると、もっと悪くなるかもしれないので、色々な食材を組み合わせたり、洋食が好きだけれど和食も食べたりすることで脂質や食塩を減らすことなどを意識していきたい。	自分の食生活はよかったところもあったが、カルシウムが不足していたので、これからは牛乳や乳製品を摂るようにしたい。	食事のバランスをチェックすると、普段は親が作ってくれるから気にしていなかったけど、色々なことがわかって楽しかった。

評価Ｃの生徒に対する手立て

ワークシートを通して、「バランスがよい」とはどのようなことか正しい理解を促し、食品の概量を把握することで、必要な食品の量を見積もり、適切な分量で調理したり、１食分の食事を計画したりできるよう、画像などで視覚的に示す。

４　主体的・対話的で深い学びの実現に向けたチェックリスト

表は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点として、『学習者』と『授業者』からの視点をまとめたものであり、主体的・対話的で深い学びを実現するために『授業者』が何に取り組めばよいのかを明示的に示したものである。

例えば、『授業者』は「具体物や例を提示して引きつける」ことを通して、『学習者』が「学ぶことに興味や関心をもつ」ことや、『学習者』が「見通しをもつ」ために、『授業者』は「既習事項を振り返る」ことや「生徒が自ら本時の目標をつかむようにする」などの視点が必要であると考えられる。

このように、表における視点については、主体的・対話的で深い学びを実現するために、『学習者』と『授業者』の視点のどちらか片方が重要というのではなく、双方の視点の往還を通して実現していくことが重要である。

	授業改善に向けた『学習者』の視点	授業改善に向けた『授業者』の視点
主体的な学び	□学ぶことに興味や関心を持つ □自己のキャリア形成の方向性と関連付ける □見通しをもつ □粘り強く取り組む □自己の学習活動を振り返って次につなげる	□既習事項を振り返る □具体物や例を提示して引きつける □生徒が明らかにしたくなる学習課題を設定する □生徒が自ら本時の目標をつかむようにする □学習課題を解決する方向性について見通しを持たせる □生徒が自分の考えを持つようにする □生徒の思考を見守る □生徒の思考に即した授業展開を考える □生徒の考えを生かしてまとめる □その日の学びを振り返る □新たな学びに目を向けさせる
対話的な学び	□生徒同士の協働を通じ、自己の考えを広げ深める □教職員との対話を通じ、自己の考えを広げ深める □地域の人など多様な他者との対話やICT等の活用を通じ、自己の考えを広げ深める □先哲の考え方を手掛かりに考える	□思考を交流させる □交流を通じて思考を広げる □協働して問題解決する □板書や発問で教師が生徒の学びを引き出す □ICTや生成AI等を活用して、多様な意見に触れさせる
深い学び	□各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる □知識を相互に関連付けてより深く理解する □情報を精査して考えを形成する □問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう	□資質・能力を焦点化する （身に付けさせたい力を明確にする） □単元や各授業の目標を把握する □ねらいを達成した生徒の姿を具現化する □教材の価値を把握する □単元及び各時間の計画を立てる □目標の達成状況を評価する

表　主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について（令和２年６月文部科学省　国立教育政策研究所）を基に作成

Topic 予測が難しい時代をよりよく生きるための金融経済教育の充実について

1　変化する社会で求められる金融経済教育

成年年齢の引下げにより、多くの高校生は在学中に成年となり、契約を含む消費生活について、自ら判断し責任を負うことになる。しかし、（公財）消費者教育センターと（公財）生命保険文化センターが実施した第４回「高校生の消費生活と生活設計に関するアンケート調査」によると、４割を超える高校生が、お金の管理方法について「特に管理はしていない」と回答している。また、資産形成への関心については、男女での差も見られた。

高校卒業後の進路は、進学や就職など多様であり、生徒のライフスタイルや直面する経済状況も異なる。物価や金利の変動、キャッシュレス決済の普及、働き方や家庭生活の多様化が進む中、家計管理の基本について理解し、ライフステージごとの課題やリスク管理の考え方を取り入れるとともに、社会保障制度等を関連付け、生活の状況に応じて家計を見直す力を育成することが重要である。

2　授業設計の３つの視点

単なる知識の習得にとどまらず、予測が困難な将来に向けて限られた資源をどのように配分するかを自らデザインする「探究的な学び」へと質的な転換を図る必要がある。



生活課題との関連

投資・保険・契約等を個別に学ぶのではなく、一つの生活課題（ライフプラン）の中で関連付けて捉える。



問いを軸にした学び

「未知の将来をよりよく生きるために、何を根拠にお金の使い方を選択すればよいのだろう」という問いを軸に、根拠をもって考え、判断し、表現する力を育てる。



生徒の実態に応じた展開

生徒の実態（進学・就職等）に合わせ、将来の生活を具体的に考える場面を設定する等といった工夫をする。

3　探究的な学びを実現する授業の流れ

ある人の 10 代から 70 代までのライフプランを見通し、その中から学校や生徒の実態に応じた生活場面を取り上げ、課題をグループで検討する実践を行う。

(1) 学校の実態に合わせた授業

学校の特色や生徒の卒業後の実態に合わせて、次の内容を例に、柔軟に組み合わせて授業を計画する。

進学型（長期的な視点とリスク管理）

国立・公立・私立大学等への進学率が高い学校では、**「教育資金（奨学金）の返済」**と**「資産形成の早期着手」**を軸とした内容で実施。

①進路設定
大学への進学（一人暮らし）→ 道内の企業へ就職
②主な学習内容
A. 一人暮らしの収支
大学進学後の収入と生活費を想定し、限られた金額の中で予算を考える。
B. 奨学金の返済と卒業後の生活
大学卒業後の初任給や手取り額を基に、奨学金の返済が生活に与える影響をシミュレーションする。
C. 資産形成と複利の効果
NISA や iDeCo 等の制度を取り上げ、シミュレーションを通して長期的な資産形成について考える。

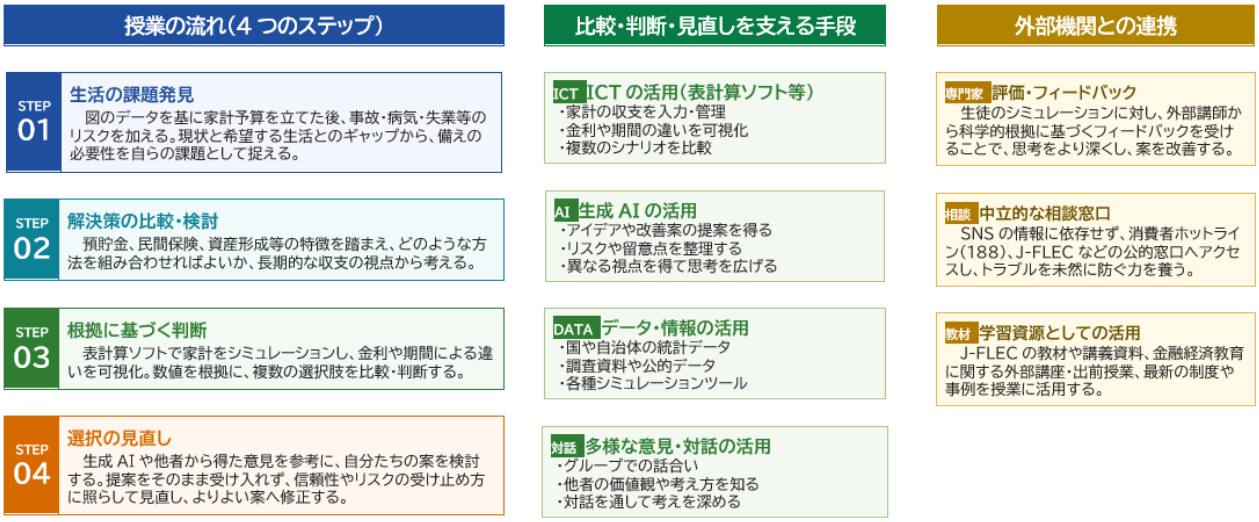
進路多様型（早期の自立と生活管理）

高校卒業後の就職や専門学校進学が半数を超える学校では、**「早期の家計管理の確立」**と**「生活上のリスクや消費者としての備え」**を軸とした内容で実施。

①進路設定
地元企業へ就職（実家通勤 or 地方都市での一人暮らし）
②主な学習内容
A. 初任給を基にした収支管理
手取り額の範囲で生活するための家計を考える。
B. 突然の支出や収入の変化への備え
予想外の出費や収入の減少に備え、生活を維持できる家計の工夫を考える。
C. 契約と消費者トラブルへの備え
ローンや賃貸契約に伴う責任、悪質商法や多重債務のリスクについて、具体的な場面を通して考える。

(2) 授業の流れと学習教材の活用

外部機関や ICT、生成 AI は、教員の授業設計を支える教材として活用する。また、探究的な学びを促す工夫として、収支の計画を作成した後に収入の減少や物価上昇等のイベントを設定し、家計を再検討させることで、生活の状況の変化に応じて、当初の収支の計画を見直す力を育成することができる。



(3) 評価規準(「おおむね満足できる」状況(B))の例

家計の構造やリスクへの備えに関する理解に加え、客観的資料を根拠に家計を見直す力や、他者の意見や生成ＡＩの提案を参考に、自らの学習やプランを調整しようとする姿勢を評価する。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
家計の構造や生活における経済と社会との関わり、家計管理について理解している。	生涯を見通した生活における経済の管理や計画の重要性についての課題解決に向けた一連の活動について、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現している。	様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、生活における経済の計画について、自分や家庭、地域の生活の充実向上を図るために実践しようとしている。

4　教科等横断的な視点

公民科で取扱う物価や金利、社会保障や、情報科で取扱うデータの収集・整理・分析と関連付けることが考えられる。家庭科では、教科の目標に即した調和のとれた指導が行われるよう他教科等で身に付けた知識やデータを生活課題に結び付け、生活者として根拠をもって選択・判断し、課題を解決する力を育てることが大切である。